

# 誠の考察 (下)

土橋 且浩



土橋且浩様は  
平成最後の夏を待たずに  
病に倒れ急逝いたしました  
彼が遺した「誠の考察」を  
二回にわたって  
お届けさせていただきます

(前号よりの続き)

超我：

自分を超えるということ

「誠」という徳を得る最後のキーワードとして、自分を超えるということについて考察をしたいと思います。

自分を超えるとは何か。私は「らしく生きる」ということをあげたいと思います。自分の都合など飛び越えた、昔の侍の言葉で言うところ「大義」というのもそうであるし、「武士らしく」というのが、この頃の大きな価値観ではなかったかと思えます。

幕末において、会津藩主・松平容保かたもりが重臣の反対を押し切り京都守護職に就いたのも、徳川家への忠義を全うするためであり、対

する尊皇攘夷派は夷敵から日本を守るという自分の命以上の大義をもっていました。

泰平の世でも武士は罪を犯した際、自宅に謹慎し、沙汰を待ったといえます。罪を犯した者にも、それを裁く側にも「武士らしく」という共通価値観があればこそ成立するスタイルです。

戦前においてもその精神は「軍人らしく」という形に変わり、「らしさ」を意識した軍人がたくさんいました。ルパン島で発見された小野田寛郎さんは記者からの質問に、

「そりゃ死にたくはないですよ。でも、時代の流れというのは個人の都合など関係なくしてしまう。そこで私は最期まで軍人らしくふるまうことを心掛けたのです。」  
と言われています。

人間らしく生きる。吉田松陰曰く、「それ学問の目的は、よろしく禽獣きんじゆうの違いを明らかにするにあり」学問の目的は、獣と人の違いを明らかにすることであると書かれています。

獣と人の違いをあげればいろいろあるでしょうが、「敬」と「孝」という二文字が最も獣と点の違いを表していると言われます。敬うことによつて慎みが生まれ、立派な人になろうという志がはじめて立ちます。

母親がわが子に愛情を注ぐのは本然ほんぜんであるのに対し、尊敬心を育むのは人道じんどうです。その役割は、母親よりも父親にかかるところが家庭教育の場では大でありましょう。学校社会でも、子ども達にいろいろな形で「敬」の心を伝えるこ